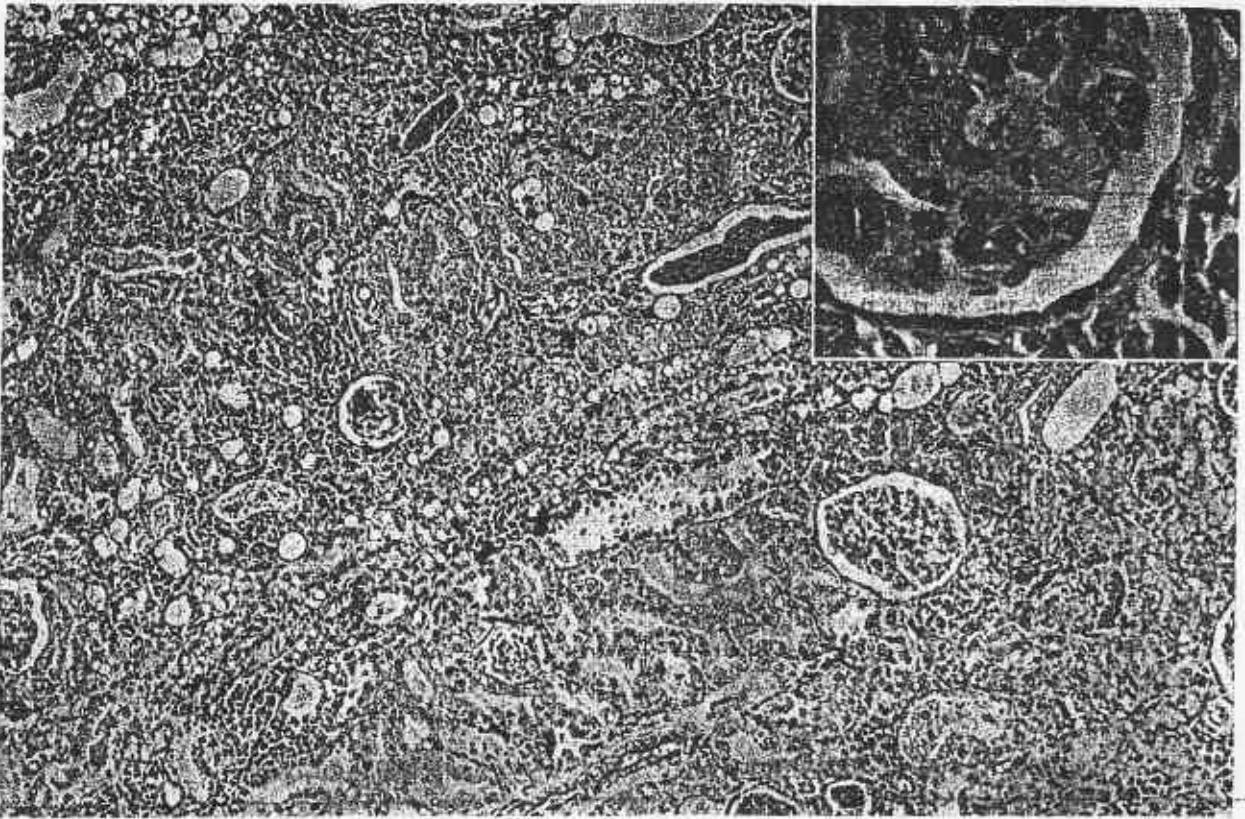


ミンクのアリューシャン病の腎病変

日本生物科学研究所出題・第3回獣医病理学研修会標本 No. 31



1956年 Hartsough and Gorham が Aleutian gene にホモなミンクに発生する一種の病気を報告し、これが後に Aleutian 病 (AD) として知られるようになった。わが国のミンク産業も、本症によつてかなりの被害をうけているようである。

主な症状は体重の減少、煩渴、暗色タール様便、口腔からの出血であり、病気が進行すると食思欠乏、嗜眠、悪液質に陥り、数ヶ月後に斃死する。主要剖検所見として、腎は著しく腫大し無数の粟粒大の灰白色巣や点状出血があり、その他脾の腫大、肝の多数の黄褐色斑、腸の出血などが見られ、口腔から出血を示した症例では歯齦炎や大小の潰瘍が歯齦や頬粘膜に認められる。

組織学的には諸臓器組織の血管周囲に多数の形質細胞浸潤をみることを特徴とする。腎の間質では、かかる細胞浸潤が特に著しく、その他肝の門脈周囲、肺の気管支周囲、脾の赤髄、リンパ節の髄索などにも高度に出現する。Obel はこのようなミンクを検索して plasma cell myeloma であるとし、また Henson らは AD 感染ミンクでは hypergammaglobulinemia があることを報告し形質細胞の繁殖、動脈周囲炎、動脈壁のフィブリノイド変性、糸球体腎炎などの存在と考え合わせてこれを人の膠原病と比較論議している。

感染ミンクの脾その他の組織乳剤を接種されるとミンクは発症するが、他の動物は感受性を欠く。0.3% ホルマリン加感染組織乳剤を 5°C で 40 週保存、あるいは 37°C で 48 時間感作後 4°C に 19 日保存することにより、ミンクに対する感染性と免疫原性を失うこと、起病因子が濾過性であることなどから原因はウイルスであろうと考えられているが、なお確定的ではないようである。

上の写真は実験的感染後、70日目に発症死した6ヵ月令、サファイア種の腎の H.-E. 染色標本を 120 倍拡大で示す。腎皮質から境界層にわたる間質には形質細胞、一部リンパ球性細胞が巣状に浸潤している。尿細管上皮細胞は全般に溷濁腫脹し、脂肪変性、剥脱、一部石灰沈着を伴うものもある。尿円柱が各所に見られる。糸球体は細胞浸潤巣内では萎縮性、巣外では一部、代償性肥大に陥るものがある。挿入図は糸球体の一部を 690 倍拡大で示す。大部分のボーマン氏嚢には外葉、まれに内葉上皮の増殖や基底膜の肥厚、膨化が認められる。糸球体ではメサンギウム細胞の軽度の増数、内皮細胞の腫大と核濃縮像、血管腔の狹窄がある。以上の所見は巣状間質性腎炎とともに、びまん性糸球体管性腎炎の存在することを強調する。なおこの材料は米国ワシントン州立犬病理学教室より分与されたものであることを付記し、感謝の意を表したい。